

氏名	熊谷直人
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第309号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉木、森、植物 〈論文〉植物のように生成する絵画
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 坂田哲也
（論文第1副査）	〃 准教授（〃） 布施英利
（作品第1副査）	〃 〃（〃） 大西博
（副査）	〃 〃（〃） O J U N
（〃）	〃 教授（〃） 佐藤一郎
（〃）	〃 〃（〃） 小山穂太郎

（論文内容の要旨）

私は1999年から現在まで10年以上の間、植物をモチーフとした絵画作品を制作してきた。ただしモチーフとしているのは、植物の姿形だけではなく、植物を目の前にした時に感じる植物の存在感そのものである。それを非常に感覚的な言葉で表現すると「生きているという事実がそのまま具現化したような存在感」と言うこともできる。そしてそれは、世界が内包する「わからなさ」を受け止め、自らの力で前進し固有の姿を生成する植物の在り方そのものを象徴していると私は考えている。私にとってそのような植物の存在は、単に作品のモチーフであるだけではなく、制作過程や世界のとらえ方にまで強い影響を与えている重要な存在なのである。本論文ではこうした「植物の存在」を軸に、私の作品制作がどのようなものなのかということ考察していく。

本論文の構成については以下のようにになっている。

はじめに

私は絵を描くという行為を続けていくことで、自分自身がどのように変化し、どのような作品をつくり、その作品が人や世界にどのように受け入れられ、どのような影響を与えるのかということを確認したいと考えている。それは、自分が作品制作の中で追及した美しさや芸術観、世界観などが世界に与える影響を確認することで、自分と世界との関係を探るという行為である。「はじめに」では、こうした私の制作動機について、制作に対する欲求や喜び、制作中の精神状態、制作態度などから考察する。また本論文全体の構成についてもここで説明する。

第一章 植物の特異性

古くから植物は、食料・材料・薬・エネルギー・酸素の供給源、心身に与える癒しの機能、デザインのイメージ等、様々な側面から私たち人間の日常生活と密接にかかわる存在である。またその一方で、様々な時代や文化圏に見られる樹木信仰に象徴されるように、人間を非日常的な世界や崇高な意識と結びつける機能を持ち、さらにはデザインや絵画など人間の創造行為とも深いかかわりを持つ特別な存在であった。本章では、私たち人間の「日常」「非日常」「創造行為」という三つの側面と植物との深いかかわりについて考察することで、植物という存在の特異性を明らかにしていく。

第二章 私の作品制作における植物の存在

私の制作は、自分が感じている植物固有の美とは一体何なのかということを通して「描く」という行為を通して思考しつづけることでもある。そして現在、私は植物の様態を含めた存在感、あるいはその在り方自体をモチーフと考え、作品の制作過程と植物の生成過程を関連付けることで「植物のような絵画」の実現を試みている。本章では、私自身の作品制作と植物とのかかわりに焦点を絞り、「過去10年間の自作品の変容と植物のつながり」「植物固有の美」「制作過程と植物とのかかわり」等の観点から、私がどのように植物という存在をとらえ、それをいかなる形で作品制作に反映させようとしているのかということ、私自身の考える美や芸術観と関連付けながら読み解いていく。

まとめ

私にとって作品制作とは、モチーフである植物の存在を媒介として世界に触れる時間の中で、自分や世界あるいはその両者の関係について思考することで作品を生成する行為である。私はその行為を通し世界とつながり、前進していこうと試みているのである。「まとめ」では、はじめに・一章・二章で考察したことを踏まえ、美術が内包する「わからなさ」という観点から、私の制作動機、芸術観、世界観と植物との密接なつながりについて考察する。

別冊

本論文（はじめに・第一章・二章・まとめ）では、「なぜ私は作品を作るのか」「なぜ私は植物をモチーフにするのか」「私はどのような作品をつくらうとしているのか」というように、私が作品制作において常に志向していることや、制作行為の根底に共通して流れているものについて考察し、私の制作行為自体がどのようなものなのかということを読み解いていくことを目的としている。つまり作品についてというよりも、むしろ制作行為そのものについて植物の存在を軸に検証しているといつてよい。それに対し別冊では、作品の一つ一つに焦点を当て考察していく。作品を制作する現場においては、制作者の芸術観や世界観などに加え、技法材料や制作に費やした時間の量や質、作者である私の心理状態や制作環境、展示環境などの様々な要素が作品の成立に反映している。別冊では、そのような作品それぞれにかかわる個別のエピソードと共に1999年から2010年までの作品写真を紹介する。

（博士論文審査結果の要旨）

本論文の筆者である熊谷直人くんは、植物や森の絵を描いている。しかしそれは、単に植物の形態や、森の光景を写し取ったものではない。森に足を踏み入れたときに包まれる空気感、光の戯れ、あるいは植物から匂い立つような色彩、そういった世界を「絵画」として作り出す。

本論文では、まずウィリアム・モリスやパウル・クレーといった画家やデザイナーたちが、植物というモチーフとどのように取り組み、それをどのように美術作品としてきたかを論考する。そこでは絵画や装飾品という人工物が、その創造にあたって「自然」からインスピレーションを受けることがいかに重要であるかが論じられる。さらに次節では、植物と日常生活との関わりを、歴史やさまざまな世界の中に探り、アニミズムの神話や、また最近の鎌倉鶴岡八幡宮での御神木倒壊の記事まで、幅広い事例を検証する。植物がもっている「垂直性」、そして成長にも関わる「時間をはらむ」といった特性を明らかにし、植物の世界を絵画に生かす具体性を明らかにしていく。そして本論文の後半では、自身の絵画の中で、植物というモチーフ、主題がどのように扱われてきたかを紹介し、絵画と植物の関係を、自身の制作体験をベースに考察する。

筆者にとって、絵画のモチーフ、主題である植物は、その形態や色彩、あるいはそれを包む空気感もさることながら、それが「生成する」存在であることを重要である。いわば植物という生命体の、成長、

あるいはその奥に連綿と続いてきた進化の歴史、そのような時間の中での展開を、絵画を描くという、同じく「時間の中での作業」と照らし合わせる。そうやって、植物のように生成する絵画の制作という自身のスタンスを明確なものにする。

本論文の筆者の制作は、一言でいえば「植物の絵を描く」ことであるが、それは単に植物を描くということだけでなく、「絵画を描く」という側面にも重きが置かれている。キャンバスと筆と絵具によって作りだされるのは、絵画という「モノ」であるが、そのモノに「植物のような」生命感を宿すことが、筆者の作品が目指していることなのである。

本論文は、以上のように長い年月をかけてつくり上げてきた筆者の絵画のスタイルを、論文の執筆を通じて明らかにし、考察によってその芸術世界を深める試みでもある。筆者が到達した世界は高く評価するに値するものであり、よって本論文を合格とする。

(作品審査結果の要旨)

熊谷は、植物を主題にした絵画を展開したなかで、絵画におけるイメージの発生と展開を、植物に置き換え創作研究をおこなってきた。博士作品においては、油絵具による絵画表現の可能性を、描く行為と連動してゆくイメージの発生に展開している。イメージに関与する身体的感覚と絵画の物質性の同一化は、彼独自の世界観を持って展開されている。植物を主題にした具体的対象に対して、光を絵画の環境としてイメージを模索し、新たな絵画イメージを予感させているといえるだろう。

作品には「色彩」と「光」、2つの調和が内包されている。

色彩の調和は、色彩のもつ固有性を解放し、地と図の関係の一体化を促すと同時に、色彩を芽生えさせる。白く覆われた絵画環境のなかで色彩が芽生え、生成し、絡み合い、絵画として独立した場を形成する。白色の地塗りの上におく最初の筆致からは、色彩は色としての個を主張するが、展開してゆく色彩の密度と構造は、個が密度をもつことで全体を形作る。個と全体の同時性において彼の思考する色彩の調和が絵画化されているといえる。

光の調和は、色彩を「光彩」に転換させる。彩度と透明性を抑えた物質的色彩は、白色の背景によって内包した色彩の固有性と純粋性を明示する。白色によって抑制された色彩の固有性は、乳白色の絵画環境によって色彩の発生を促す。さまざまな色彩が独立したがかたちで複雑に絡み合い、視覚においての混色に展開する。光の色が交差することで、色彩は、そのイメージを光彩に導いてゆく。この変換作用において、乳白色の背景が光に変わり、色彩が光を彩る。

自己の可能性を着実に開拓している彼の制作姿勢を評価すると共に、博士作品として提出された作品は、いずれも熊谷独自の絵画世界を提示するものであり、博士の学位を認めるに相応しい優れたものであるという評価で全員一致した。

(総合審査結果の要旨)

熊谷直人は、東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程油画研究領域の学生として第六研究室に所属している。熊谷は植物に「特別な魅力」を感じ、植物の生成するさまを視覚的、体感的に捉え、それをイメージの発想の原点としている。藝大入学以来、一貫して日記を書くように植物や森をテーマに制作している。植物の様々な生成の変化を、絵画によって色彩と形態と光の効果を追求し作品化しているのである。

本論文も作品も、熊谷の最大の関心事である「植物の存在」をキーワードに、ウィリアム・モリス、

パウル・クレー、セザンヌなど、植物や森に共鳴していた先人の作家を検証している。自身の作品がいかなる影響を受けたかも、植物や森が日々生成し、変化、成長を遂げていくように、自身の絵画作品を掲げて論じている。このことが、本論文の軸となり全編を通しての主題となっている。

制作に関して言えば熊谷は、白地の画面全体、つまり空間に植物の一部である一葉、あるいはいくつかの異なった色彩のタッチを、ゆっくりと絡ませながら、点々と置いていく。それは、下地の白色と融合し、次第に光をも内包する絵画へと変貌されていく。筆圧を確かめるように植物の生成を促すように画面上で成長させていくのだ。描写に頼らない独自の朦朧とした形態が生まれ、色彩と光が上昇するように乱舞し、構成される。そこには新しい一枚の画面という環境の中で明度のある鮮やかな色彩と、明度の低い色彩とが息づく。熊谷の目指す「植物の絵」を描くように「絵画」を描いている実感となるのである。絵画を描くということは思考と作業の果ての結果である。絵画という「しろもの」に利き腕の触覚で生命をもたらすことに他ならない。

本論文に加え、この10年の藝大在籍中の作品を当時の制作状況を顧みながら作品編として提出する。論文を執筆することで熊谷の10年の歩みが確実に記録された。

文化庁による海外派遣で2年間ベルリンに留学したことも今後の制作の励みとなるであろう。帰国後の学外での発表も多く、これからの作品の展開が楽しみである。

留学を含め、5年にわたる博士在籍中の制作姿勢は油彩に限らず、ドローイング、水彩に至るまで、独自の表現の展開を求め、意欲的でその成果を着実に修めつつある。審査委員の数回にわたる会議があり、本論文は課程博士の学位論文に相当するものであるとして、全員一致の上、合格と判定することにした。